元曲公案劇の構成
――冤罪への手続き――

村上公一

（一九九一年四月二四日受理）

はじめに

冤罪事件を中心テーマとする八作品を取り上げ、元曲公案劇の類型化について考える。本稿では冤罪への手続きについて見ていくことにする。[注①]

題材とする作品は以下の通り。

「旦本」（女主役本）五篇

①「救孝子賢母不認屍」（元曲選本）

②「包待制知賺灰闌記」（元曲選本）

③「感天動地竇娥冤」（元曲選本・古名家雑劇本・酹江集本）

④「錢大尹智勘緋衣夢」（脈望館鈔本・古名家雑劇本・顧曲斎本）

⑤「清廉官長勘金環」（脈望館鈔本）

「末本」（男主役本）三篇

⑥「神奴児大鬧開封府」（元曲選本）

⑦「河南府張鼎勘頭巾」（元曲選本・古名家雑劇本）

⑧「張孔目知勘魔合羅」（元曲選本・元刊本・古名家雑劇本・酹江集本）[注②]

一

事件が起き、一人（時には二人）の無実の人間が犯人として役所に訴えられる。この時点で冤罪への第一歩が踏み出され、役人の不明により有罪の判決が下され、冤罪が確定する。この過程は役所に訴えられる場面と、不明な役人による裁きの二つの場面に分けることが出来る。

まず役所に訴えられる場面。被告の性別により全く異なった形をとる。初めに女性が被告となる「灰闌記」「竇娥冤」「勘金環」「神奴児」「魔合羅」について、「魔合羅」を例に見ていく。

［李文道云］俺哥哥已死了。你可要官休私休。
［旦云］怎生是官休私休。
［李文道云］官休、我告到官司、教你與我哥哥償命。私休、你與我做老婆便了。
［旦云］你是甚麼言語、我寧死也不與你做老婆。
［李文道云］你和我見官去。
［旦云］我情願見官去。李大、則被你痛殺我也。
［拖旦下］
［李文道せりふ］兄貴は死んだ。お前は公にしたいか、内々に済ませたいか。
［旦せりふ］何が公で何が内々なの。
［李文道せりふ］公なら役所に訴えお前に兄貴の命を償ってもらう。内々なら俺の女房になれば良いのさ。
［旦せりふ］何ってこと言うの。死んだってあんたの女房になんかならないわ。
［李文道せりふ］一緒に役所へ行くぞ。
［旦せりふ］望むところよ。あなた、私を苦しめないでよ。
［旦をひっぱって退場］

劉氏（旦）は夫が行商の旅の帰途で病に倒れていることを知り、出かけて行って家に運び込むが、既に死んでいる。劉氏に横恋慕している従弟、李文道が先回りをして毒殺したのである。李文道は間男との関係がバレるのを恐れて殺したのだろうと詰めよる。その後の一段である。

整理すると以下の五点にまとめることが出来る。

一、原告（犯人）が「官休」「私休」の選択を迫る。
二、被告が「官休」「私休」の内容を尋ねる。
三、原告（犯人）が「官休」「私休」の内容を説明する。
四、被告が「官休」を選択する。
五、原告（犯人）が被告を連れて退場する。

一から四は全ての作品に共通する。特に一・二は用いられる言葉もほぼ同じ。

［搽旦云］你要官休、還是要私休。
［正旦云］怎生是官休、怎生是私休。　「灰闌記」
［張驢兒云］你要官休要私。
［正旦云］怎生是官休、怎生是私休。　「竇娥寃」
［李仲義云］我問你要官休也可是私休。
［正旦云］怎麼是官休私休。　「勘金環」
［李德義云］嫂嫂你要官休也私休。
［大旦云］怎麼是官休、怎麼是私休。　「神奴兒」

三は「私休」の内容から二種類に分かれる。

［張驢兒云］你要官休呵、拖你到官司、把你三推六問、你這等瘦弱身子、當不過拷打、怕你不招認藥死我老子的罪犯。你要私休呵、你早些與我做了老婆、倒也便宜了你。　「竇娥寃」
［搽旦云］你要私休、將一應家財房廊屋舍帶孩兒都與了我、只把這個光身子走出門去。你要官休呵、你藥死親夫、好小的罪名兒、我和你見官去。　「灰闌記」

[李仲義云] 官休、拖你見官去、你便是死的人也。私休呵、將家私孩兒都與我、你自身出去。「勘金環」

[李德義云] 你若是官休呵、我告到官中、三推六問、吊拷綳扒、你無故因姦氣殺俺哥哥、謀害了姪兒、不怕你不招。你若是私休呵、你將那一房一臥都留下、則這般罄身兒出去、任你改嫁別人、這個便是私休。「神奴兒」

「竇娥寃」は「魔合羅」と同じく自分の女房になること。後の三作品は子供を残して身一つでを家を出る（「神奴兒」では子供が殺されてしまうので、ただ身一つで家を出る）こと。「官休」は全て裁判で決着をつける（命を失う）こと。いずれも「（你要）官休呵……、（你要）私休呵……」と並列して説明する形を取る。

四も類似した表現がみられる。

[正旦云] 我原不曾藥死親夫、怕做甚麼、情願和你見官。「灰闌記」

[正旦云] 我又不曾藥死你老子、情願和你見官去來。「竇娥寃」

[正旦云] 能死也不肯、我心上無事、我和你見官去來。「勘金環」

[大旦云] 我肚裏膽壯、怕做甚麼。我情願你見官去。「神奴兒」

全て初めに事件との係わりを否定した後で、「（我）情願和你見官去來」「我和你見官去來」といった積極的に裁判を求める言葉が述べられる。

五は「灰闌記」の他は全て原告と被告が一緒に退場する。

[張驢兒拖正旦・卜兒下]「竇娥寃」

（[正旦唱]）……[同下]「勘金環」

[正末云] 我和你見官去来。[同下]「神奴兒」

「竇娥寃」以外は「引っぱって」とは直接書かれてないが、次の役所の場面で彼等の登場するト書きが「李仲義同淨外旦、拖正旦・倆兒上」（「勘金環」）「李德義・搽旦扭大旦・正末同上」（「神奴兒」）とあることから引っぱっての退場であることは明らかである。

「灰闌記」では、このあと犯人と裁判を担当する令史との密談の場に変わる。そのため正旦扮する被告は一人で退場する。これは犯人の一人（間男）と裁判を担当する令史が同一人物であるという特殊性による。

次に男性が被告となる「救孝子」「緋衣夢」「勘頭巾」について「緋衣夢」を例に見ていく。

[王員外云] 好阿、兩手鮮血、還不是你里、正是殺人賊。明有清官、我和你見官去來。

[王員外扯李慶安科、李慶安云] 天那、着誰人救我也。[同下]

[王員外せりふ] おっと、両手に血がついて、これでも白を切るつもりか、お前が犯人だったんだ。お役人って方がいるんだ、一緒に役所に行こう。

[王員外、李慶安をひっぱるしぐさ。李慶安せりふ] 神様、誰にすがったらいいの。[一緒に退場]

李慶安は王員外の娘閨香と婚約しているが、家が貧乏になったため破談を申し出られる。閨香は下女を通して李慶安に嫁取りの費用を渡そうとする。約束の場所に行った李慶安は下女の死体を見つけ驚いて家に帰って来る。閨香から事情を聞いた王員外は李家に押し

かけて来る。この場面は李慶安の手に血が付いていることが分かった後のやりとり。

この場面のやりとりは以下の三点に整理できる。

一、訴える側は自信を持って裁判に臨む。

二、冤罪者が諦め、嘆きの言葉を吐く。

三、訴える側が冤罪者を引っぱって退場する。

一は他の二作品でもほぼ同じ言葉で表現されている。

［卜兒云］還説個甚麼、我女孩兒現今没了。明有清官、我和你見官去來。　「救孝子」

［旦云］好也、你與了我保辜文書、不上十日、就把員外殺了。明有王法、我和你見官去來。　「勘頭巾」

いずれも、相手の犯行を明らかにしたあとで、「明有清官（王法）、我和你見官去來」と言う。

二と三は「勘頭巾」にも当てはまる。

［王小二云］我門也不曾出、可怎麼冤我殺了員外、誰人與我做主咱。［下］

「誰人與我做主咱」は先の「天那、着誰人救我也」とほぼ同じ表現である。退場のト書きは［下］とのみあるが、役所の場面で［旦拖王小二上、云］とあることから、ここでも旦が王小二を引っぱって退場したのであろう。

「救孝子」では、この場面に続いて、浄扮する推官と丑扮する令史が登場し、戸外で訴えを聞く。そのため原告が被告を引っぱって退場することはない。また被告本人の影が薄く裁判は殆ど正旦扮する母親と役人の間で進められる点は他の作品（被告の性別を問わず）と異なっている。

二

次に裁判の場面。被告の性別により大きな差異はない。田中謙二氏は、この場面を院本の挿演であるとし、次の三つの手続きに分かちうるとする。[注③]

一、官人（孤）が告訴人に向かって土下座（跪）し、廷吏にたしなめられる。

二、官人は無能のため、外郎（令史）を呼んで裁判を委任する。

三、裁判を委任された外郎は原告から賄賂をとり、拷問によって被告に無実の供述を強い、死刑を宣告する。

ここではこの三段階をもう少し細分化し、併せて裁判場面の始まり方と終わり方、さらには前後とのつながりについて考えていく。

原告が被告をひっぱって退場し、舞台に誰もいなくなった所に、浄扮する官人が供回りのもの（張千・李万）を連れて登場し役所の場面が始まる。

「魔合羅」であれば、次のように始まる。

［浄扮孤引張千上］［詩云］我做官人單愛鈔、不問原被都只要、若是上司來刷卷、廳上打的鷄兒叫。小官是河南府的縣令是也。今日坐起早衙。張千、看有告狀的、着他進來。

［張千云］理會的。

［李文道同旦上云］你尋思波。
［旦云］我只和你見官去。
［李文道云］我和你見官去來。冤屈也。
［孤云］拏過來。
［張千云］當面。
［孤做跪科］
［張千云］相公、他是告状的、怎生跪着他。
［孤云］你不知道、但來告的、都是衣食父母。
［張千喝旦跪科］
［孤云］你兩個告甚麼。
［李文道云］小人是本處人氏、嫡親的五口兒、這個是我嫂嫂、小人是李文道、有個哥哥李德昌、去南昌做買賣回來、利増百倍、當日來家。嫂嫂養着姦夫、合毒藥殺死親夫。大人可憐見、與小人做主咱。
［孤云］我問你、你哥哥死了麼。
［李文道云］死了。
［孤云］死了罷、又告甚麼。
［張千云］大人、你與他整理。
［浄、孤（官人）に扮し、張千を引き連れて登場］［詩せりふ］俺は役人お金が大好き、原告被告のどちらも頂く、上司が裁判調べにきたら、役所で鶏の鳴き声上げよう。それがしは河南府の県令でござる。今日は朝の務めをいたす。張千、訴人があれば入らせい。
［張千せりふ］かしこまりました。
［李文道、旦と登場、せりふ］よく考えてみろよ。
［旦せりふ］あんたとお役人のところに行くだけさ。
［李文道せりふ］一緒にお役人のところに行くぞ。訴えでございます。
［孤せりふ］連れてまいれ。
［張千せりふ］まいりました。
［孤、土下座するしぐさ］
［張千せりふ］お奉行、やつらは訴人です、なに故に土下座なさいます。
［孤せりふ］お前は知るまいが、訴えに来るものはみな飯の種じゃ。
［張千、旦をどなり土下座させるしぐさ］
［李文道せりふ］てまえは当地の者で、五人家族、これは兄嫁で、てまえは李文道でございます。兄の李得昌は南昌に商い行ってまいり、大変な利益をあげて当日帰宅しましたところ、兄嫁は間男をこしらえており、毒薬を調合して夫を殺しました。お奉行さま、お裁きの程、よろしくお願いいたします。
［孤せりふ］お前に聞くが、お前の兄は死んだのか。
［李文道せりふ］死にました。
［孤せりふ］死んだなら、そのうえ何を訴える。
［張千せりふ］お奉行、裁いてやって下さいよ。
「灰闌記」に犯人達の密談の場面が挿入されている以外は、全て

先に見た告訴に踏み切る場面に続いて役所の場面が始まる。また「救孝子」では告訴の受付は戸外で為されるが、一旦は全員退場し、改めて舞台を役所に移して取調べが行われる。

引用部分が一の手続きに当たるが、もう少し細かく整理してみる。

一、浄扮する官人（孤）が供回りのもの（張千）を引き連れて登場し、滑稽な上場詩を詠み自己紹介をし、張千に命じて告訴の受付を始める。

二、原告・被告が、先程退場した時と同じ形で―被告が原告に引っぱられて―登場する。（場合によってはここで原告が被告に「官休」について再確認する）

三、官人が告訴人に向かって土下座するなど無能ぶりを示す。

四、原告が告訴文を読む。

一の上場詩については既に岩城秀夫氏が道化役の扮装と関係づけて論じているが、そこでも指摘されているように、類似した詩句が用いられている。[注④]

我做官人只愛鈔、再不問他原被告、上司若還刷卷來、廳上打的狗也叫。　「救孝子」

我做官人勝別人、告狀來的要金銀、上司若還刷卷來、在家推病不出門。　「竇娥寃」

我做官人實是妙、告狀來的則要鈔、上司若還説卷來、廳上打的鶏兒叫。　「勘金環」

以上は「魔合羅」とほぼ同じ。

官人清似水、外郎白如麵、水麵打一和、糊塗成一片。　「神奴児」「勘頭巾」

これは「魔合羅」では後に登場する令史の上場詩と全く同じ。

自己紹介は全て「小官（是）……是也」の形。続いて告訴の受付が開始される。

今日坐起蚤衙、左右與我擡放告牌出去。　「灰闌記」

今早升廳坐衙、左右喝攛廂。　「竇娥寃」

今日坐起早衙、外郎喝攛廂放告。　「緋衣夢」

今日陞廳、坐起早衙、張千喝攛箱放告。　「神奴児」

今日升廳、坐起早衙、張千喝攛箱。　「勘頭巾」

これも類似した語句が用いられている。

こうして一通り役所の場面の地ならしが済んだところへ、二の如く原告・被告が登場する。この流れも全てに共通する。一旦は戸外で訴訟の受付が為された「救孝子」もやはり同様の手続きがとられる。被告の意志の再確認は「魔合羅」の他には「灰闌記」「勘金環」に見える。

三の土下座については「灰闌記」「神奴児」「竇娥寃」に見えるが、ここでは詳しくは論じない。[注⑤]

こうして初めて四、犯人からの告訴がなされる。この文体も類似している。殆どが「小人是……」で始まり、最後は「大人（可憐見）、與小人做主咱」で結ばれている。

次に、官人が裁ききれず令史を呼ぶ二の手続き。

［孤云］我那裏會整理、你與我去請外郎來。

［張千云］外郎安在。

[丑扮令史上][詩云]官人清似水、外郎白如麵、水麵打一和、糊塗成一片。小人是蕭令史、正在司房裏攢造文書、只聽得一片聲叫我、料着又是官人整理不下甚麼詞訟、我去見來。

[孤せりふ]わしには裁ききれぬ、外郎を呼んでくれ。

[張千せりふ]外郎どの、いずれに。

[丑、令史に扮し登場][詩せりふ]官人は水のように清らか、外郎は小麦粉のように白い。水と小麦粉こね合わせ、いい加減にまるめあげる。それがしは蕭令史、部屋で書類を作っていたら、それがしを呼ぶ声が聞こえる。大方また官人どのが何か訴えを裁ききれねとみえる、見に行くとするか。

官人のみによって裁かれる「竇娥冤」、令史が官人と一緒に登場する「救孝子」「緋衣夢」には令史のみの登場場面はない。

官人に呼ばれて登場する令史もまた滑稽な上場詩を詠む。ここで詠まれている「官人清似水、外郎白如麵、水麵打一和、糊塗成一片」は先に見たように「神奴兒」「勘頭巾」では官人が詠む。この詩句が白く塗りたくった令史の顔を前提にしたものであることは岩城氏の説く通りである。[注⑥]「勘金環」の令史も同じ詩を詠む。「神奴兒」の令史の上場詩は次の通り。

天生清幹又廉能、蕭何律令不曾精、纔聽上司來刷卷、登時諕的肚中疼。

これは「魔合羅」等で官人の詠むものに近い。「灰闌記」「勘頭巾」の令史は上場詩を詠まない。

こうして官人から裁判を委任された令史は取調べを始める。継いで三の手続き。

[令史見犯人科云]這廝我那裏曾見他來。哦、這廝是那賽盧醫。我昨日在他門首借條板櫈也借不出來。今日也來到我這衙門裏。張千拏下去打着者。

[張拏科李做舒三個指頭科云]令史、我與你這個。

[令史云]你那兩個指頭癇。

[李文道云]哥哥、你整理這樁事。

[令史云]我知道、休言語、你告甚麼、原告是誰。

[李文道云]小人是原告。

[令史云]你是原告、説你那詞因來。

[李文道云]小人是本處人氏、是李文道、有個哥哥李德昌、去南昌做買賣、利增百倍還家。俺嫂嫂有姦夫、合毒藥藥殺俺哥哥。令史、與我做主咱。

[令史云]是實麼、畫了字者。張千、拏過婦人來。兀那婦人、你怎生藥殺丈夫。從實招來。

[旦云]大人可憐見。小婦人是劉玉娘、俺男兒是李德昌、南昌做買賣回來、在城外五道將軍廟中染病。妾身尋了個頭口、直至廟中、問着不言語、取到家中、七竅迸流鮮血、驀然氣絶而死、妾身喚小叔叔來問他。小叔叔説妾身有姦夫、妾身是兒女夫妻、怎下的藥殺男兒。大人、妾身竝無姦夫。

[令史云]不打不招。張千、與我打着者。

[張千打科]

[令史云]你招了罷。

[旦云] 小婦人竝無姦夫。
[令史云] 不打不招。張千、與我打着者。
[張千又打科]
[旦云] 住住住、我待不招來、我那裏受的這等拷打、我且含糊招了罷。是我藥殺俺男兒來。
[孤云] 你休招、招了就是死的了也。
[令史云] 你既招了、將枷來枷了、下在死囚牢中去。
[孤云] 張千、取枷來上了枷者。
[張千云] 枷上了、下在牢中去。
[旦云] 天那、誰人與我做主也呵。[下]
[令史、犯人を見るしぐさ、せりふ] こいつはどっかで出会ったことがある。あっ、こいつはあの薮医者だ。昨日やつの門前で腰掛けを借りようとしたが貸してくれなんだ。そのくせ今日この役所にやって来ようとは。張千、引きすえて打てい。
[張、引きすえるしぐさ。李、三本の指を伸ばすしぐさ、せりふ] 令史さん、これだけ差し上げます。
[令史せりふ] お前の二本の指は病気か。
[李文道せりふ] 兄貴、この一件を裁いて下さいよ。
[令史せりふ] こころえた、もう言うな。お前は何を訴えるんだ、原告はどっちだ。
[李文道せりふ] てまえが原告です。
[令史せりふ] お前が原告なら、申し立ててみい。
[李文道せりふ] てまえは当地の者で、李文道でございます。兄の李得昌は南昌に商いにまいり、大変な利益をあげて帰って参りましたところ、兄嫁は間男をこしらえており、毒薬を調合してまえの兄を毒殺しました。令史さま、お裁き願います。
[令史せりふ] 事実であろうな、署名いたせ。張千、おなごを引きつれよ。そこのおなご、何故に夫を毒殺した。ありていに白状せよ。
[旦せりふ] お役人さま、お願いでございます。わたくしは劉玉娘でございます。夫は李徳昌で、南昌に商いに行ってまいり、城外の五道将軍廟の中で病気にかかりました。わたくしはロバを借りてまっすぐ廟に行き、聞いても一言も喋らないので、家に連れ帰ったところ、口や鼻から血が流れ出て、突然息絶えて亡くなりました。わたくしは義弟を呼んで、どうしたら良いか尋ねました。すると義弟はわたくしに間男がいると言うではありませんか。わたくしは子供の頃からの夫婦です。どうして夫を殺しましょうか。お役人さま、わたくしには間男などございません。
[令史せりふ] 打たねば吐かぬ。張千、打てい。
[張千打つしぐさ]
[令史せりふ] 白状いたせ。
[旦せりふ] わたくしには間男などございません。
[令史せりふ] 打たねば吐かぬ。張千、打てい。
[張千また打つ]
[旦せりふ] だめだめ、白状しないつもりでいたけど、こんな拷

問には耐えきれない。ここは適当に白状してしまおう。わたくしが夫を殺しました。

［孤せりふ］白状いたすな。白状すれば命がないぞ。

［令史せりふ］白状したからは、枷をはめて死囚牢に入れましょう。

［孤せりふ］張千、枷を取ってきてはめい。

［張千せりふ］枷をはめました。牢屋に入れます。

［旦せりふ］神様、誰にすがったらいいの。［退場］

これも細かく整理してみる。

一、令史は原告側から賄賂を受け取る。

二、原告が訴状を読む。

三、被告が事実を説明する。

四、令史は被告を拷問し、被告は自白する。

五、被告は枷をはめられて死囚牢にいれられる（諦めの言葉を残し、張千に連れられて退場）。

一の賄賂の授受も類似したしぐさによってなされる。このやりとりのある「緋衣夢」「勘金環」「神奴児」も全て、「魔合羅」同様〈原告側が指を三本立て銀三両を申し出る—令史が残りの二本も立てさせ五両にする〉形を取る。

買収された令史は原告に訴状を読ませる。官人の前でも読んでいるので、同じ言葉を二度繰り返すことになる。最後は先程とは違い、「令史、與我做主咱」で結ばれる。

次に令史は被告に問いただす。被告は事の推移を一通り説明し、無実を主張する。

四の拷問は、全て「不打不招」を理由になされる。被告は拷問に耐えきれず、自己弁解の言葉を述べた後で、犯行を自白する。いずれの作品でも〈拷問—否認—（拷問—否認—）拷問—自白〉の形をとり、拷問抜きで、あるいは一度の拷問で自白してしまうことはない。「竇娥寃」のように、自分に加えられる拷問には耐えきり、義母に加えられる拷問で自供するものもある。

継いで被告は枷をはめられて、張千に死囚牢に連れられて行く、つまり退場するわけだが、この時諦めと嘆きの言葉を残す。「神奴児」「勘頭巾」でも「天那、着誰人與我做主也」と「魔合羅」とほぼ同じ言葉で表現される。正旦が被告に扮する「灰闌記」「竇娥寃」「勘金環」では唱で表現されている。男性の被告が役所に訴えられるときに発したのと同様の言葉を、女性の被告はここにきて初めて発するのである。

田中氏の三段階の手続きではここまでしか触れられていないが、最後に舞台に残った官人と令史の退場の仕方にも類型化が見られる。

［孤云］令史、你來、恰纔那人舒着手、與了你幾個銀子。你對我實説。

［令史云］不瞞你説、與了五個銀子。

［孤云］你須分兩個與我。［同下］

［孤せりふ］令史ちょっと、さっきあやつは指を伸ばして、そちに幾らくれたのだ、ありていに申せ。

［令史せりふ］隠さず申しますと、銀五両もらいました。

［孤せりふ］わしに半分よこせ。［一緒に退場］

この部分は作品によって大きく二種類に分かれる。一つは「魔合羅」のように分け前の分割についての相談や、事件解決のねぎらいがあり、官人と令史は一緒に退場する形。他に「灰闌記」「勘頭巾」がこれに当たる。

もう一つは新任官の着任を迎える準備をする形。「神奴児」を例に挙げる。

［外郎云］張千、你伏侍我一日、辛苦了、不曾吃飯。張千、你自吃飯去。如今新官下馬、我待接新官去也。［下］

［孤云］你看麼、斷事一日、飯也不曾吃。外郎和張千都去了、着一個擡擡這卓子也好。罷罷罷、我自家端着這卓子罷。［做掇卓科下］

［外郎せりふ］張千、一日わしにつき合ってご苦労だったな。飯もまだだろう。張千、飯を食べに行け。新任官が着任なさるから、わしはお迎えに行こう。［退場］

［孤せりふ］どうだい、一日中裁きをして飯もまだ食べておらん。外郎と張千は帰ってしまった。誰かにこの机を運ばせねば。仕方ない、わしが運ぶとするか。［机を引きずるしぐさ、退場］

「緋衣夢」はほぼ同じ。「勘金環」は官人が張千と机を片付け先に退場する。「救孝子」は机を片付ける場面がなく官人と令史は一緒に退場する。

三

ここでこの二つの場面の劇中に於ける意味について考えてみよう。

先ず始めに、被告が女性である場合の「官休」「私休」にまつわるやりとりについて。この場面は単純に告訴への橋渡しの役割を果たしている男性の場合と較べ些か複雑である。

犯人は「官休」ではなく「私休」を期待しており、被告の意志で「官休」が選ばれることには注意を払う必要がある。これは役所での再登場の場面で原告により被告の意志の再確認が行われていることからもわかる。犯人の目的は被告を獄につなぐことにあるのではなく、殺人により自己に有利な状況を作り出そうとしているに過ぎない。被告が「私休」を選び、自分に有利な状況が自然と転がり込んでくることを望んでいるのである。「官休」の内容を説明するときの原告の口ぶりには、彼達が正しい裁判が行われないこと対する自信の程が窺われる。その自信の裏付けは、後の行為からも分かるように「賄賂」であった。つまり裁判には賄賂が付きもので、正しい裁判などはありえないというのが〈舞台の上の世界の〉現実であり、彼達はそれを知っているのである。

一方、寃罪に陥る女性達にはその現実が見えていない。だから、屈辱的ではあるが安全でもある「私休」を選ばずに、本来あるべき（しかし実際にはありえない）正しい裁判を思い浮かべ「官休」を選んだのである。逆に寃罪に陥る男達はこの現実が見えているからこそ、訴えられることになった段階で既に諦めそして嘆くのである。

「官休」「私休」のやりとりは、観衆に〈舞台の上の世界の〉現実と被告の見ている（想定している）現実とのズレを明確に感じさせ、悲劇を予感させるであろう。

次に役所での裁判の場面はどうだろう。

浄扮する官人の登場、滑稽な上場詩で、不正な裁判は現実そのものとなり、悲劇の予感は決定的なものとなる。この後でしばしば被告の「官休」の意志の再確認がなされるが、改めてこのズレを明確化する働きがある。続いて令史の登場、賄賂の授受そして拷問と現実は情け容赦なく被告に襲いかかる。そしてこの場面のクライマックス〈自白〉に到る。

先に述べたように〈自白〉は必ず〈拷問―否認―（拷問―否認―）拷問―自白〉の形を取る。初めの拷問ではまだ本来あるべき裁判を夢みている状態は続き、二度目の拷問の後で発せられる「住住住、我待不招來、我那裏受的這等拷打、我且含糊招了罷」といった言葉により、被告の目は、現実そのものを見つめるようになったことが観客にはっきりと示される。二度の拷問は被告の劇的な変身を印象づけるのに効果的である。

これ以後の被告は、以前の姿とは全く違ってしまう。先ずこれまで決して諦め嘆くことの無かった女性達が一斉に諦め嘆きの言葉と共に退場する。更に、次の場面で明察な役人の取調べに際しても、これまでのように進んで身の潔白を申し立てることがないどころか、そのことを役人の側から問われても答えないという状態になる。[注⑦]

「緋衣夢」で脈望館鈔本以外では不正な裁判の場面が見えないのは、男性が被告の場合はこの場面が必ずしも必要ではなかったことを表している。初めからズレが存在せず、訴えられることになった段階で、既に原告、被告、観衆の全てが有罪になると納得していれば、改めてこの裁判の場面を挿入する必要はないことになる。

四

ところで役所の場面は、賄賂の山分けの相談やねぎらいで終わるものと、新任官の着任にまつわる話で終わるものがあるが、どちらが本来の形であろうか。後続する部分とのつながりをみると、前者には矛盾する点が全く見られないのに対し、後者には幾つか矛盾点が見受けられる。

後者の末尾は新官出迎えの準備のために退場することと、舞台上の机を片付けることの二点に要約される。例に挙げた「神奴兒」では外郎（令史）が新官出迎えのために張千とともに退場し、一人残された官人が机を片付けて退場する。「緋衣夢」も外郎と張千が新官出迎えのために退場した後、一人残された官人が机を片付けるが、そのせりふとしぐさは非常に滑稽である。

［浄官人云］外郎這厮無禮也。問了一日人命事、我也不知道怎麼了了。他把艮老又挾了、又領的張千接新官去了。倘或新官下馬、問我這庄公事、我可怎麼了。［做打滚叫科、云］天也、兀的不欺負殺我也。他都去了。卓兒也没人擡。罷、罷、罷、我自家収拾了家去。［頂卓兒云］炒豆兒、量炒米。［下］

［浄扮する官人せりふ］外郎は無礼なやつじゃ。一日中殺人事件を裁いておったが、どう決着がついたのかわしにもわからん。あやつは金をせしめた上、張千まで連れて新任官の出迎えに行ってしまった。新任官が来てこの一件についてお尋ねになったら、わしは一体どうしよう。［ころがって叫ぶしぐさ、せりふ］神様、そんなに苦しめないで下さい。二人とも行ってしまって、机は誰が運ぶんだ。仕方が無い、わしが自分で片付けるとするか。［机を担いでせりふ］煎り豆いらんかね、煎り米いらんかね。[注⑧]

［退場］

ころがって叫んだり、机を担いで物売りを真似て売り声を上げたりする辺りには道化役の持ち味が遺憾なく発揮されている。

さてこの二作品、いずれもすぐ後に新任官が登場し、新官出迎えについては問題はない。ところが、「神奴児」ではこの場面と新任官登場の間に令史が書類を整理する場面が挿まれており、そこでは明らかに机が使われている。また「緋衣夢」では引続き新任官の登場となるが、初めに張千が登場し、「擡書案（机を持って参れ）」とのせりふがある。官人がわざわざ片付けた机が次の場面では初めから必要なのである。

元曲のみならず中国の演劇では一般に場面転換は舞台の上に登場人物が誰もいななくなることによって行われる。つまり一旦全ての登場人物が退場すれば背景、道具などがそのままでも、場面（時間・場所）が変わったことは明らかなのである。そもそも背景は同一、道具も机一つ程度であり、場面の変化に影響を与えるものではない。現在演じられている崑劇、京劇等でも机は終始舞台に置かれているのが普通である。

にもかかわらず一度片付けられてすぐに持ち出されるのは何故か。当然片付ける側に原因があるはずである。では片付けられたのは何故か。それはこの場面が院本の挿演であることと関係づけて説明することが出来る。もともと院本の終わりでは机が片付けられていたとすればどうだろう。一つの芝居の終わりに舞台道具である机が片付けられるのは極めて自然なことであろう。

一人取り残された官人が机を担いで退場する様子は非常に滑稽であり、「緋衣夢」や「神奴児」ではそのままの形で劇中に取り込んだため、次の場面でまたすぐ机を持ち出さなければならなくなったと考えるべきだろう。一方、賄賂の山分けの相談や労いによる退場はこれを劇の流れに合わせて整理したものということになろう。平板ではあるが、前後のつながりに無理はない。

新任官出迎えも「勘金環」では後続の内容と結び付かない。

［官人云］明日新官下馬。外郎、喏収拾了書案、接新官去來。

［張千随下］

［官人せりふ］明日新任官殿が到着なさる。外郎、机を片付けて新任官殿をお迎えにいこう。［張千一緒に退場］

官人の口から、明日新任官が到着するとはっきりと述べられている。

次の場面は銀細工屋である。まず検死人の妻が証拠品の耳飾り（片方）を売りに来て、続いて関係者の王婆が失くした耳飾り（片方）をあつらえに来る。ここから事件が解決に向けて動き出すのだが、

既に裁判から一年たっている。事件を解決するのは当然「明日到着する」新任官ではない。この新任官にまつわる話は二度と出てこない。

にもかかわらず新任官出迎えについて言及されるのは何故か。これも院本の挿演によるものと考えるべきだろう。院本の末尾ではもともと新任官出迎えが語られていたが、これらの作品が全て後に明察な役人によって冤罪が晴らされるという筋を持ち、この新任官を後から登場する明察な役人として読み取ることができるため、たまたま違和感なく劇中に組み込まれているということになる。「勘金環」では食い違いがはっきり出てしまったのである。さらに推し進めれば、院本末尾の新任官出迎えから、明察な役人による釈冤へと話が膨らんでいったという可能性も捨てきれない。

ではこの院本の末尾で新任官出迎えについて語られるのは何故か。先に挙げた田中氏の三つの手続きでも落とされているように、この末尾の部分は全体に関わるような内容は持っていない。意味は一つ、場面（あるいは院本）の終了にすぎない。その意味では賄賂の山分けの相談や労いでも十分だし、ただ退場していくだけでもよい。

いままで登場していた役人が新たな役人の到着を告げ、役所の中（机）を片付けて去る。この「役人」を「役者」に置き換えればどうなるか。いままで登場していた役者が新たな役者の到着を告げ、舞台の上（机）を片付けて退場する。これは一つの芝居の終わりを告げ、同時に次の芝居の始まりを予告するものと受け取るのが自然であろう。とすれば、この院本は別の院本あるいは全く別の芸能の前に演じられるものであったことになる。

おわりに

以上、本稿では役所に訴えられる場面と不正な裁判の場面の類型化について、前者は被告の性別によりその形は大きく異なり、後者は被告の性別に関係なく基本的に同じ形をとること、またこの二場面の劇中における意味は被告が男性の場合に較べ女性の場合の方が大きいということ等を述べた。さらに推論ではあるが、院本の挿演である裁判場面について、その古形について考えてみた。

注① 本稿は「元曲公案劇の構成—事件・人物関係・配役—」（福井大学『国語国文学』三〇　一九九一）の続編として書かれたものである。

注② ④「緋衣夢」⑤「勘金環」が脈望館鈔本による以外は原則として元曲選本による。

注③ 「院本考—その演劇理念の志向するもの—」（『日本中国学会報』二〇　一九六八）

注④ 『中国古典劇の研究』（創文社　一九八六）第一部、第三章「道化役の扮装」

注⑤ 田中前掲論文参照。

注⑥ 岩城前掲論文参照。

注⑦　例えば「魔合羅」では、新任府尹の取調べに対する被告の応対は以下のようである。

［府尹云］兀那女囚、你是劉玉娘。你怎生因姦藥死丈夫。恐怕前官枉錯了。你有不盡的言詞、從實説來。我與你做主咱。

［旦云］小婦人無有詞因。

［府尹云］既他囚人口裏無有詞因、則管問他怎麼。將筆來、我判個斬字、押出市曹殺壞了者。

［旦云］天也、誰人與我做主也呵。

［府尹せりふ］そこの女囚、お前が劉玉娘だな。どうして夫を毒殺したのだ。前任官の誤審ではないかな。申し開きの足りぬ点があれば、包まず申してみよ、わしが取り計らってやろう。

［旦せりふ］私には何も申し立てることはございません。

［府尹せりふ］囚人に申し立てることがなければ、いくら問うても仕方が無い。筆を持って参れ、「斬」の判決を書く。刑場に護送して処刑せよ。

［旦せりふ］神様、誰にすがったらいいの。

新府尹の側から「我與你做主咱」と救いの手を差し伸べているのに、被告は何も申し立てず、最後には先程の裁判の時と全く同じ言葉「天也、誰人與我做主也呵」と嘆くのである。

注⑧　文中の「艮老」は『全元戲曲』第一巻（人民文学出版社　一九九〇）の校訂に従い「銀老」として解釈した。